

純粹倫理において、心と体は不可分な相関関係にあり、互いに強い力で影響し合い、その根幹は心にあるとされています。

人間は本質的に「真心」を備えています。同時に自己本位な思考から生じる「わがまま」な心も持ち合わせています。

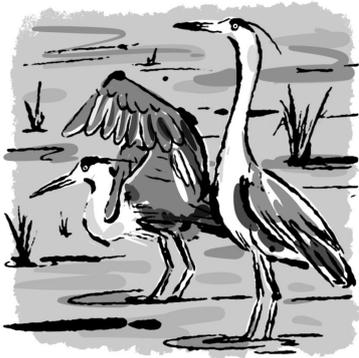
物事が期待通りに進まない時に芽生える心配、怒り、あるいは他者を責める心や不足不満といった「不自然な心」の集積が、病苦を招く根本原因となります。

こうした内面的な不自然さは、個人の健康を損なうだけでなく、家庭や企業にも負の影響を及ぼす性質を持っています。

この倫理的な疾病観は、現代医学の変遷とも整合性が見られます。厚生労働省の令和五年度調査によれば、推計入院患者数約一一七万人のうち、傷病分類別では「精神及び行動の障害」が最多で、現代社会において心の状態が健康維持に直結していることがデータから裏付けられています。

かつて疾病の原因は遺伝子異常などにあるとされてきましたが、現在は「ストレス」が最大の要因であると説明されています。免疫学者の安保徹氏は、著書『最強の免疫学 病気は自分で治せる！』の中で「病気は適応を超えた生き方である適応障害、つまりストレスが続いた時に起こる」と提唱しました。過度な悩みや無理が続くことで自律神経（末梢神経）が乱れ、体調不良を引き起こすと指摘しています。

すなわち、病苦とは心の乱れに端を発する適応不全の結果であると言えるでしょう。



実践を通して心身の免疫力と組織の健全性を高める

疾病の原理は、人体の健康のみならず、組織や企業経営といった「人の営み」全般にも現われます。企業とは人間の働きの集積であり、その中心となる経営者の心のあり様が「社風」として反映されるためです。

例えば、代謝や解毒を司る肝機能が低下すると初期症状として倦怠感が現われるように、組織内に活気が欠け、重苦しい空気が漂っている状態は、組織としての機能不全を示唆しています。

企業における不自然な相（社内の鬱憤や停滞）は、経営者自身の内面的な不自然さが可視化されたものであり、組織の不調は経営者の心の状態を映し出していると捉えるべきです。

病苦や組織の停滞を克服するためには、ストレスの原因を見つめ直して不自然な心を捨て去り、「明朗」な心へと転換することが不可欠です。苦難を「自己の生き方の誤りを正すためのシグナル」として謙虚に受け止めることで、心身の免疫力は再生へと向かっていくのです。

具体的には、直面する困難を「これがよい」と言葉に出して肯定的に受容し、物心両面において感謝の念を持つて後始末を徹底すること、そして毎朝の習慣を通じて心をリセットし、常に清新な状態を保つことが求められます。

こうした純粹倫理に基づいた心の管理を通じて、いかなる境遇にあっても不動の心を養い、個人と組織の活力を最大化させる生活を日々継続して実践したいものです。